

せむぎがぬぐつゝのり

ある日曜日の夕方のことだった。

ぼくは、おばあちゃんの家に行った帰り、弟と二人で電車に乗っていた。

日曜日だから、電車に乗っている人はそれほど多くなく、ところどころにまだ席があいていた。みんなどこかに遊びに行った帰りらしかった。小さい子どももいたが、つかれているようで、話し声のしない静かな車内だった。

△駅に電車が止まると、何人かの人が乗ってきて、あいている席にすわった。

ぼくがはっとしたのは、みんなが席にすわったところ、最後にゆっくり乗ってきたおじさんを見たときだった。

その人は、白いつえをついている。そして、つえの先で、電車のゆかをコツコツとたしかめるようにしながら、ゆっくり乗ってきた。

(目が見えないようだけど、だいじょうぶかな。)

ぼくは心配になって、その人の方を見ていた。

ドアがしまり、電車が動きだすと、その人はよろけそうになりながら手すりにつかまった。電車がゆれるたびに、手すりをにぎる手に力をこめているようだった。

ぼくは、気になって仕方がなかった。でも、どうしたらいいか分からなかった。すると、となりに座っていた弟がひそひそと話しかけてきた。

「あいている席があるんだから、だれか座らせてあげればいいと思うんだけど。」

ぼくは、迷った。

ぼくは、思い切っておじさんのそばに行った。

「おじさん、その席に座ってください。」

すると、おじさんは

「ありがとう。でも、いいよ。」

と答えた。ぼくは、

(何で座らないのかな。えんりよしているのかな。)

と思い、

「えんりよしないで。どうぞ、こっちです。」

と言って、おじさんの手を取ろうとした。

「本当にこのままでいいんだ。」

ぼくは、どうしたらいいのか分からなくなった。

せまがあらうるのに

すると、おじさんが

「声をかけてくれて、ありがとう。ドアの近くにいれば、自分の力でおりられるんだよ。」
と言った。